三瓶山周辺の６世紀末～７世紀の竪穴建物跡

鈴　木　七　奈

１．はじめに

出雲国と石見国の境にある三瓶山の周辺地域および、神戸川流域とその支流域では、これまでの発掘調査で弥生時代～奈良時代の竪穴建物が多く見つかっている。その中でも、５世紀～７世紀の遺構・出土遺物から、６世紀末～７世紀前葉に、集落変遷・生活様式を共有する集団が、各集落に居住していたことが分かっている（島根埋文2023）。

本項では、過去の調査事例から、良好な状態で検出・調査報告された６世紀末～７世紀にかけての竪穴建物跡を紹介する。

２．三瓶山周辺の集落遺跡（図１）

三瓶山周辺の集落遺跡は、飯南町志津見地区・八神地区・角井地区・頓原地区・大田市三瓶地区に所在する。

これらの遺跡は、神戸川とその支流の河岸段丘上や丘陵の緩斜面上に位置し、弥生時代～奈良時代の竪穴建物跡等が検出された。

飯南町志津見地区には神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡・神原Ⅲ遺跡・板屋Ⅲ遺跡・門遺跡が所在する。各遺跡は神戸川によって形成された河岸段丘・丘陵の緩斜面上に位置する。神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡・神原Ⅲ遺跡では、古墳時代中期～奈良時代、板屋Ⅲ遺跡では弥生時代後期～奈良時代の竪穴建物跡が見つかっている。

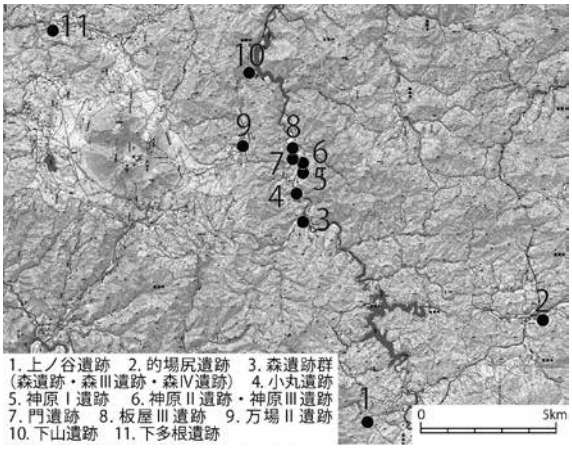

図１　三瓶山周辺の集落遺跡

同町八神地区の森遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡（以下、森遺跡群と記載。）・小丸遺跡は、神戸川の河岸段丘上に位置する。森遺跡群では弥生時代後期～奈良時代の竪穴建物跡が見つかっており、とりわけ古墳時代後期後半（６世紀末～７世紀初頭）の竪穴建物跡は他遺跡よりも多く検出された。

角井地区では万場Ⅱ遺跡・下山遺跡が所在する。万場Ⅱ遺跡は古墳時代終末期～奈良時代（７世紀～８世紀）の竪穴建物跡が多く見つかっており、周辺地域内ではやや後出する集落である。

頓原地区の的場尻遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代終末期の竪穴建物が見つかった。

大田市三瓶地区の下多根遺跡は三瓶山北側に位置し、三瓶川の河岸段丘上に位置し、古墳時代中期から奈良時代の竪穴建物跡が見つかっている。

３．６世紀末～７世紀の竪穴建物跡

当該地域の竪穴建物の規格・出土遺物の特徴

本地域の当該期に造られた竪穴建物は規格や立地には共通性があり、一辺が３～５ｍ程度の方形で造り付け竈を備え、地形に沿って並ぶように建てられることが多いことが特徴である。

竪穴建物跡から出土する土器は、６世紀中葉までは土師器のみだったのに対し、６世紀末以降には須恵器が全体で出土した土器の内、２割～３割程度確認されるようになる。土師器の器種比率は、５世紀までは甕・高坏・小型丸底壷が中心であったが、６世紀末以降は甕が圧倒的に多く、次いで甑・坏が出土する。須恵器の出土比率については、６世紀末～７世紀前葉は蓋坏が中心だが、７世紀中葉以降は蓋坏とほぼ同じ割合で高坏が出土するようになる。

これら６世紀末以降の出土土器の比率から、炊爨に使用する甕・甑などの道具は土師器を、供膳に使用する蓋坏・高坏は須恵器を使用している様相が見て取れる。

竪穴建物跡（６世紀末～７世紀）

SI10（森遺跡）

森遺跡群は、前述したとおり周辺地域の中でも拠点的な集落であった可能性がある。

SI10は本遺跡内でかなり良好な状態で検出された竪穴建物で、平面は4.5m×５mの方形、北壁に石組みに粘土を貼り付けた造り付けかまどを有する。床面では周溝と主柱穴、中央ピットが検出された。

遺物は建物内全面から大量に出土し、床面直上では須恵器蓋・土師器坏・土師器高坏の計13個が伏せられ、集積した状態で出土した。これらの遺物は籠などの有機物に入れられていたものが、入れ物の腐食によりこのような状態で出土したと考えられる。これらの遺物から、６世紀末～７世紀初頭の建物跡だと思われる。

SI44（森Ⅲ遺跡）

森遺跡群に含まれる森Ⅲ遺跡のSI44は、本遺跡の中でもやや高い位置に、同様の規格を持つ竪穴建物とともに、一列に並ぶように配置されている。本遺構の規格は4.3m×5.2mの方形で、南壁隅寄りに石組み粘土張りの造り付けかまどを有する。床面には主柱穴が２つと、中央の柱穴が１つ見つかった。

本遺構では、須恵器の坏身・高坏、土師器の甕・坏・甑・高坏が出土しており、前述した当該期における竪穴建物内の出土遺物の特徴をよく示している。出土遺物から、７世紀前半の建物跡だと思われる。

SI-28（万場Ⅱ遺跡）

万場Ⅱ遺跡は丘陵の緩斜面に位置し、７世紀代の竪穴建物跡が多く検出された。

SI28の平面の規格は５m×5.5mで、北壁中央に石組みの造り付けかまどを有する。床面からは主柱穴４つと壁帯溝を検出した。建物内からは遺物が多く出土しており、とりわけ炊爨で使用する甕が多く確認された。また、鋸歯紋が施された土製の紡錘車などが出土しており、類似する石製紡錘車が平野部でも出土することから、鋸歯紋紡錘車を使用した祭祀を行う集団が当該期にまとまって移住してきた可能性が指摘されている（池淵2019）。

４．おわりに

本稿では三瓶山周辺の遺跡と遺構の紹介をするに留まったが、今後はこれらの資料から中国地方山間部の竪穴建物を中心とする遺跡資料をさらに収集し、集落の変遷や平野部との関係性を明らかにしていきたいと考えている。

主要参考文献

池淵俊一2019「出雲平野における6・7世紀の水利開発とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター2023『猪子原遺跡　上ノ谷遺跡　高城跡　小原遺跡』島根県教育委員会

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

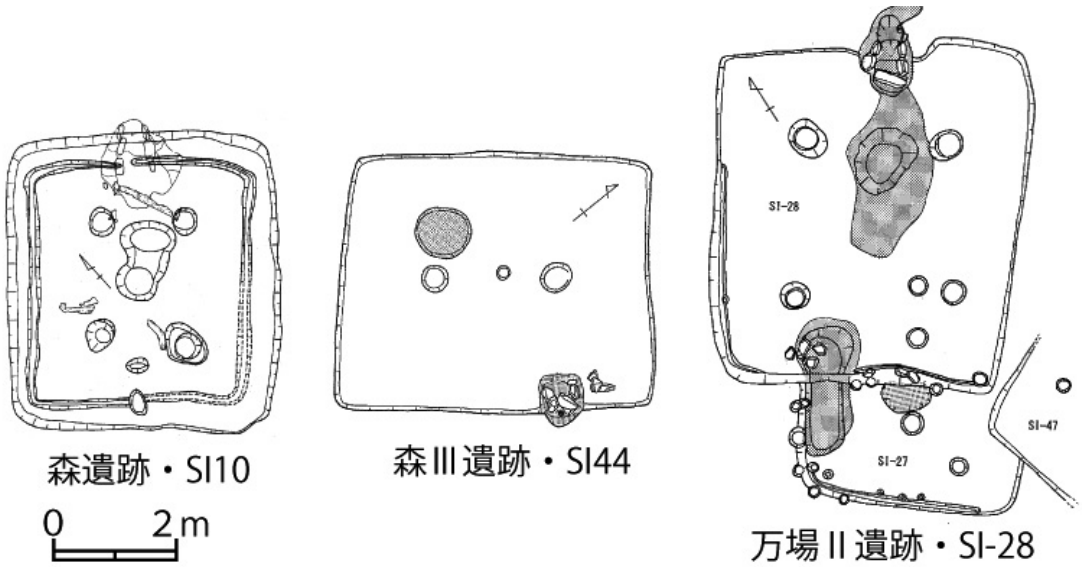

図２　主要な竪穴建物跡（森遺跡・森Ⅲ遺跡・万場Ⅱ遺跡）